

初心者が「ピアノによる弾き歌い」を4ヶ月で2曲マスターするための助力となり得る方法の可能性について (その2)

高 橋 寛 幼児教育科

(2012年10月1日受理)

〔 要 約 〕

ピアノの学習経験に乏しい学生たちが、4ヶ月間で2曲の子どものための歌を、ピアノを使っての弾き歌いがマスターできるようになるための、有効な方法を探ってみた。15年間に演習として徐々に進化してきた著者の授業の中に、学生の人間的成長にも寄与できるその近道が隠されているか、検討した。イントロダクション、脱力・呼吸・発声・リトミック、という内容を繰り返すことで、徐々にではあるが、「自身の存在をコミュニケーションの発信機にする」必要性を理解し、そうありたいとする気持ちが醸成されてきたところを見計らって、次なる段階へ学生をいざなうことが学生たちの音楽習得に有効に作用しているとの感触をつかめた。更に、短大入学以前の教育機関での音楽の授業ではなかなか理解しにくかった音楽の基礎知識や音楽理論について、著者の解説手法(実例・実演を交えながらのアナログで丁寧な口演)やアプローチの方法(学生の疑問・質問を第一義に内容を構成する)が音楽入門編(初心者向き)として確かな効果を生み、学生たちの「理解してみよう」という意欲を増進させていることが、学生たちの授業中の反応や種々のレポートなどにより明らかになってきた。

I. はじめに

日本に西洋音楽が輸入されて久しい今日ではあるが、ピアノや声楽を学ぶきっかけが「音楽をコミュニケーションの手段として使う」ことである人はそう多くはない筈だ・・・と音楽大学で学んだ経験上、筆者は確信するし、「使える程度にその技術を修得している」人は更に少ないということは、多くの共演者と様々なジャンルの舞台を経験してきた上で筆者は感じている。幼児教育者に相応しい「ピアノによる弾き歌い」を短期間でマスターさせることは、幼児教育者養成校にとって、子どもの表現に係る保育技術を保育との関連で修得できるようにするという観点から、必須のことであろう。本論では、筆者が短期大学という教育の現場で実践に基づき可能と心得た表記の項目について、人の成長の可能性と阿吽のチームワークの重要性を論じつつ述べたいと思う。

II. 目的・方法

必修科目である音楽基礎A(歌)、子どもと音楽A(歌)、子どもと音楽C(歌)の3つの教科(平成22年度までは「音楽I(声楽)」「音楽III(声楽)」)はともに「歌うこと」を基本にすえての音楽の基礎的な知識

と技術の修得を目指すのであるが、これらを著者が1名で担当している。本研究では、学生たちが、筆者の体験してきた舞台表現のエッセンスを追体験しながら「学ぶ」「習得する」過程での人間的成長を確実に果たせるかどうかを明らかにしていく。

以下は、過去16年間の羽陽学園短期大学幼児教育科に入学したすべての学生が保育士資格取得のための「必修科目」として履修し、体験し成果として「2曲の弾き歌い」「音楽をコミュニケーションの手段の一つとして使う」ことが可能になる過程を記したものである。ただ、入学年度によっては学生の個性が際立って異なる場合もあったので、それに応じて15回の授業のうちの複数回の実施順序を入れ替えた年度もあるが、内容としては総合的に同一である。

目的を達成するために以下の方法を用い、実践の中で、ピアノ音と自分の声との対話により「音程」の感覚と「ピアノの鍵盤の配列」を学ばせ、「テンポ」「調性」「拍子」といった音楽理論上の規則の持つ意味に気づかせようと試みた。

1. 音楽の基礎知識①、聴音・採譜(4回目の授業)
2. 弾き歌い実技①、音楽の基礎知識②、長調と短調
①、ピアノという楽器の構造解説(5回目の授業)

3. 弾き歌い実技②、毎日の子どもの歌、春の歌、ピアノの演奏法の色々（6回目の授業）

4. 弾き歌い実技③、音楽用語とイタリア語、移調（7回目の授業）

（1回目から3回目までの授業についてはすでに《その1》で述べた）

III. 実践

1. 音楽の基礎知識①、聴音・採譜（4回目の授業）

・音楽理論①・記譜法・採譜による弾き歌い用楽曲の作成

～「14ひきのこもりうた」の部分聴音・採譜、記譜法、DVD「オケルンジャーとあそぼう」^(註1)部分。～

i. 未完成の課題曲楽譜を配布、楽曲、原作絵本、原調（B♭）のことを説明。

・「14ひきのこもりうた」（詩：いわむらかずお／曲：寺島尚彦／編曲：たかはしかん）の弾き歌い用の楽譜（教員自身の手書きによる未完成な状態のもの）を学生に配布する。（譜例-④）

・まず教員が弾き歌いを実演し、学生は各自の手元の譜面を目で追いかけているながら、その演奏を聴くことになる。未完成（メロディー・パートと歌詞は、

歌い出しから2小節分しか書いていなくて殆ど空白）な部分を発見した学生たちに、「この空白を、これから自分の耳で聞いた情報を元に書き埋めていく。この作業を『聴音』と『採譜』という」と説明し、筆記用具の準備に取り掛からせる。このとき、必ず、鉛筆かシャープ・ペンシルを使用するように求める。理由として「間違えたら、書き直せるようにするため」と話す。

・最初に教員が歌詞を読む。その歌詞を聞き取り、譜面上に書き込ませる。毎年、どの学生も教員の歌詞の朗読に耳を澄ますことになる。この時が「情報を耳から入れて理解し記憶するためには、自らは寡黙になるほうが良い」ことを学生に伝える最初のチャンスである。授業中に教員が話す冗談のような「音楽のよもやま話」の中に、真実が潜みそれが期末のミニ試験に出題される・・・ということも付け加えながら、「私語は慎み、授業に集中せよ」と伝える。

・次に、メロディー・パートの音を聴き取る作業に移る。2小節ずつ数回にわたり（ピアノのみで弾いたり、歌声だけだったりする）演奏して音楽を聴き取らせ、譜面に書き込ませる。これには「ありえない」「絶対ムリ」などの声も学生たちから漏れてくるが、取り合わず進めていく。『直前の音と比較して、高いか低いか同じかが基本で、あとはどれくらい高いか低いかという程度問題』が重要だと説明する。

ii. 「聴音」「採譜」「弾について説明し、まず教員が演奏してみせる。

iii. ト音記号、ヘ音記号、ピッチ・ネーム、楽譜からの情報の読み取り法。

iv. 声による音程のとり方はヤマ勘であり、ヴァイオリン、トロンボーンと同じ。

v. 音符、休符の種類、大譜表、『4分の4拍子』の意味。

・「聴音」とは、耳から入手した音の情報（音楽ではない雑音や言葉も含めて）を世界共通の記譜法に則って「採譜」し記入することであり、そのための『イ・ロ・ハ』について丁寧に、しかも手短かに学生たちに説明する。

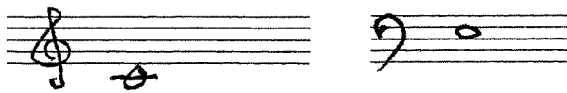
まず、「14ひきのこもりうた」の未完成楽譜を用いて、多岐にわたる音楽の基本理論について説明する。

その中の冒頭にある記号（譜例-④の↓A部分）について問うと、これにはほとんどの学生から

『ト音記号!』との正答が返ってくるが、①「ト」とは何語?→日本語のイロハニホヘトの「ト」のこと。②板書した「音部記号」無しの状態の五線譜上に「下第一線上」に全音符を書き入れ（譜例-⑤）、これは「ドレミファソラシド」のうちの何の音?→『ド!』という答えが必ずどのクラスでも出てくる。ここで、すぐに正解は出さず他の学生の反応をを待つことが肝要かと思う。「このままでは決められない。ト音かヘ音の音部記号がないと答えが出せない・・・」の返事がクラスの中から1名でも出てくれば幸い。なるべくこの反応が出てくるまで待つ。（出てこないと判断した際は、止むを得ず次の段階に移る）③・・・では、この音部記号は何を規定するのか・・・?という問いを学生に投げかけてみる。この問いには、ほとんどの場合反応がない。というのも、こういう問われ方をした経験が少ないようなのだ。つまり、前出の『「音部記号」無しの状態の五線譜上のどこかに全音符が存在する』ということの不便さ・理不尽さを、高等学校までの音楽教育の中で確認したり教わったりしてこなかった・・・ということなのだろう。

ここで、前出の『「音部記号」無しの状態の五線譜にト音記号、ヘ音記号をそれぞれ書き加えて、それぞれの「下第一線上」に全音符を書き入れてみせる。（譜例-⑥）

すると学生からは「ド」と「低いほうのミ」と正答が返ってくることになる。



譜例-⑥（「ド」と「低いほうのミ」）

教員が以下を学生に説明する。*時折、やや講談口調（緩急強弱を自在につけて）になってもかまわないから、学生の興味を引きつけながら語ることが肝要。

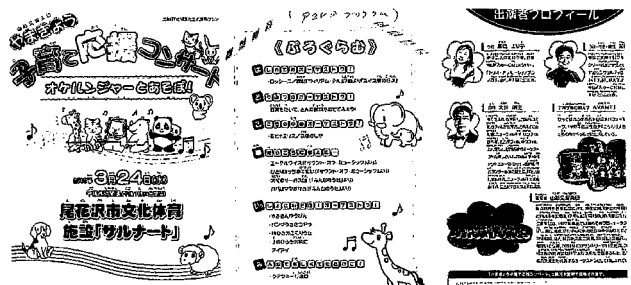
- 日本への西洋音楽の輸入と伝播の際に、「欧米世界との戦争による敵性国語の使用制限」と「日本独自の表記を目指す文部省」というプライドとタイミングが一致したが故の『日本独自のものであり、他国では全く通用しない』「イロハニホヘト」を用いた『調号』『調性』の呼称がいまでも国内で使用されていること。（野球の解説やラヂオでの実況放送でも、）さらに、（後日に詳しくは説明することになるが）ピッチ・ネームの説明を用いての、A音が「自然音」と呼ばれ、音楽の始まりと現在の音階の配列と作ったのがギリシャ時代の

ピュタゴラス [紀元前570~496年頃] という数学者であること。（この数学者の名前をクイズ形式で設問してみると、授業は盛り上がる。つまり、音楽の基礎を作ったギリシャ時代の有名人は誰? という設問で、ピュタゴラスのほかに、ソクラテス [紀元前470~399年]、アリストテレス [紀元前384~322年頃]、プラトン [紀元前427~347年]、アルキメデス [紀元前287~212年頃] などを候補に挙げて、クラスに「誰だと思いか? 多数決にしようか?」と挙手による投票を呼びかける。様々な結果が出てくるが、それらのどれにも丁寧に応対し、人物についても説明する。）

次に「4分の4拍子」（譜例-④の↓B部分）については、分母の4は『4分音符を1拍と数えて』の意味であり、分子の4は『1小節で4拍（4カウント）数える』との意味を教授し、入学前までの曖昧な理解からの脱却を全員に徹底させる。

また、「14ひきのこもりうた」の楽譜を利用して『大譜表』についての説明を行い、歌のパート、ピアノの右手と左手のそれぞれのパートが同時進行しつつ音楽を作っていくのだということを理解させる。その際にこの3つのパートに共通でなければならない音楽を構成する要素として「テンポ」「調性」「拍子」であることは、かなり重要なこととして学生に必ず伝える。

- vi. DVD「オケルンジャーとあそぼう」の1シーンを見る。



写真（プログラム）



写真（舞台）



写真（舞台）

1年前ほどに、この短大の学生たちが、プロのオーケストラ「山形交響楽団」と、プロの歌手でもある教員夫妻との県内巡回公演に賛助出演し、多数の子どもの歌やダンスや手遊びやちょっとしたお芝居などで観

客を巻き込んでゆく模様を、収録されたDVDを使って全員で鑑賞する。「エーデルワイス」の筆者と女性共演者の二重唱のシーンでは、学生たちが演奏に聴き入り、ため息をつくなど、感受性の豊かさを感じさせる反応を示したし、とくに「14ひきのこもりうた」を先輩学生たちがオーケストラ伴奏により、また、メリハリの利いた演出と照明の中で演奏している様子に於いては、「いつか自分もあの舞台に立ちたい」という憧れのまなざしを持って鑑賞する姿が多く見られ、学生たちの学習へのモチベーションを上げる効果を生んでいるようだ。

vii. 「14ひきのこもりうた」のメロディーを聴音・採譜して完成させる。全員で歌う。

そしていよいよ各自で書き加えた「14ひきの子守唄」の弾き歌い用楽譜、を完成させていく。ピアノパートの奏法についても説明を加え、全員が「書けた」となり次第、これを読み込みつつ全員で合唱してみる。

viii. 採譜見本を学内に掲示、次回はメロディーを右手で弾きつつ歌う課題を告げる。

次回までの弾き歌いの課題を示す。「一人で発表する」「前半まで」「右手でメロディー・パートを弾きつつ、その音に合わせて歌う、」というのが最低条件である。まず、歌声による音程の感覚を掴ませ、人前で発表する勇気と恥をかく経験を積むことこそが最初の演習の最大の狙いであることを学生には改めて熱く伝える。

採譜の見本を学内に掲示することとし、全員が各自

の譜面と照合し確認するように求めて授業を終える。

2. 弾き歌い実技①、音楽の基礎知識②、長調と短調
①、ピアノという楽器の構造解説（5回目の授業）

- ・弾き歌い①～（右手メロのみ）。～
- ・1名が弾き歌いを披露し、他の全員が観客となる「公開レッスン方式」であるので、「トライしたい学生から自主申告で順番」か「教員から指名された順番」かを学生たちに選択させ、順次、演奏・発表させる。この時、発表者以外の学生には「観客・オーディエンス」の役割を義務付ける。その狙いは以下である。

「目と耳を集中して発表を味わう」

「拍手・笑い・どよめき・喚声などにかく反応すること、そのことが発表者への最高の礼儀でありフィード・バックであり、これを得ることで人は健全な成長を遂げられる」

- ・発表の前に「〇〇番、山形花子です」と名乗って拍手をもらってから演奏、発表を終えたらまたオーディエンスに一礼し自分の席に戻る。
- ・発表の途中はなるべく教員は離れた場所で見守り役に徹し、どうしても先に進めなくなるような事態に学生が陥った場合にのみ、助け舟として近寄り最低限の字助言・指導を行う。ピアノの個人レッスンとは違い、あくまでも「各人の発表の場」であり、客席からのフィード・バックを学生が全身で受け止められるように配慮することが肝要である。教員が指導し過ぎないことで、学生たちは自分で考え様々な「演奏のスタイル」を披露してくれるようになる。

～ 14ひきのこもりうた ～

入門 楽譜 ★

(左→右の指) 詞: 山形花子 曲: 高橋 寛

(通称) 14ひきのこもりうた (14ひきのこもりうた) 高橋 寛 編曲

譜例-⑦ (完成形の楽譜例)

- ・発表の後には、一人分ずつ、必ず教員からのコメントを観客席に向けて投げかけるようにする。公開レッスンの意味合いは「全員の個性を互いに知り、個々への教員の指導を全員が己のものとして共有する」ことにあるから、演奏の巧拙ではないほかの要素であっても、教員からのコメントは学生たちにとっては貴重なものであると考える。
- ・最終的にはかならず全員がトライするのだが、クラスの半数ほどが発表を終えたら、ブレイク・タイムとしての《ピアノ解体ショー》に移る。
- ・ピアノという楽器の構造解説
 - i. 学生Aにグランド・ピアノの蓋の全開を指示する。
 - ii. さらに、学生Bに譜面立て部分を本体からはずすよう指示し、それを安全に保管できる教室の片隅への移動を指示する。
 - iii. クラス全員をピアノの周囲に集合させ、弦の張ってある内部が見えるように位置取らせる。
 - iv. 教員が鍵盤部分の蓋をはずし、学生Cに手渡し壁側に立てかけての保管を指示する。
 - v. 鍵盤部分の両サイドの土手を裏面（地面側）の大きなねじをはずして本体から離し、ねじと土手のセットとして、学生Dには左側を手渡し「ミッキー・マウスと黒チーズ」、学生Eには右側を「ミニー・マウスと黒チーズ」と名づけて、それらの保管を指示する。
 - vi. 鍵盤部分手前の横長の土手を本体からはずし、学生Fに手渡して、その保管を指示する。
 - vii. 鍵盤部分を手前にスライドさせて引き出し、ピアノという楽器の心臓部分を学生に見せる。教員が弾こうとするとハンマーが空しく宙を蹴りバラバラと上下に舞うだろう。
 - viii. この時、ハンマーの上部に黒っぽい筋（滲み）があることを学生に気づかせる。これは、弦を下方から突き上げて打ったときの、弦の錆のトレースであり、中央部分は3本、低音（左側）に移るにつれ2本、1本と少なく、また逆に高音（右側）部分は1本となっていることにも気づかせる。センター部分の3本の筋は、ピアノの「調律」の意味を説明するには最適の物証で、3本の弦を同じ高さの音（ピッチ＝振動数）に揃えないと耳障りの悪い「歪んだ響き」、いわゆる「音が狂っている」状態になることが学生には理解の助けとなるようだ。
 - ix. ダンパー（長音）ペダルを踏めば、打鍵後、鍵盤から手を離しても弦の上部にあるフェルト製の遮音パーツ（かまぼこ型）が宙に浮いたままで、打鍵した音はそのまましばらく響き続けることを、

これも実際に演奏を聴かせて確認させる。（チャイコフスキー作曲のピアノ協奏曲の部分などを例に出して演奏すると理解が早いようだ）

- x. シフティング（弱音）ペダルを踏むと鍵盤全体が左側（低音側）にやや移動し、その幅は、中音域（センター部分）の弦一本分であることを、まず視覚的に確認させる。次に、ノーマルな状態での打鍵音と弱音ペダルを使用した上での打鍵音の響きの違いを聴覚から確認させる。つまり、シフティング（弱音）ペダルを踏みながら（すると、鍵盤部分全体が右側に少しスライドする）演奏すると、それまで3本の弦を打鍵していたハンマーが（スライドしたが為に）2本しか打鍵しなくなり、結果として音量も響きも減ずることを、体験を通して理解させる。これによって「音量が3分の2になっている」事が確認できる。
- xi. 半音と全音のこと、ピアノという繊細な楽器の取り扱いなどを、実体を持って理解させるために、アップライト・ピアノの輪切りの模型（松戸市・サキヤピアノ製作）を使って解説し、更に、グランド・ピアノを分解して見せて、演奏法を交えつつ音楽理論をも解説する。この際の（特にグランド・ピアノの分解に際しては）学生たちへの解説は決してショー・アップしすぎず、さりどて堅苦しすぎず、というバランスを重視して、行うことが大切で、保育や教育や介護の現場で働くようになったときの、『事故が無いように、ピアノを楽しく扱う』ための強力な助言となりうる。
以下は、その例である。

「君たち素人が面白半分で分解作業を真似てはいけない」

「見たとおりの緻密でアナログな機械なので、湿気・埃・急激な温度変化・振動は厳禁」

「ピアノの蓋の上に飲食物は決して乗せないこと、特に花瓶や飲み物（ペットボトルも不可）は厳禁」

「ピアノを移動させる場合は、蓋をすべて閉じてから、本体を浮かせ気味にしつつ行う」

「アップライト・ピアノはなるべく壁に瀬をつけて配置し、地震に備え柱などにロープなどで括り付けて固定する倒壊防止策を講ずる事業所が多い」

「地震の際、グランド・ピアノ本体の下に身を隠すのは自殺行為、3本の足は脆く、本体は300kg以上もある！」

「ピアノの蓋は、急に閉じて指を挟むと骨折を超える大事故に繋がりがねないので①誰でも常に弾けるようにあけておいて蓋が閉じないように固定する。」

か、または、②常には必ず施錠して鍵の管理を厳密にし、職員が介在する行事などの際にのみ開錠して使用する・・・のどちらかにしておくほうが安全である」

「学生に、アップライト・ピアノの右端部分の輪切りの教材を見せる。千葉県松戸市のサキヤピアノ^(註2)の社長：崎谷延好氏の弁《もう古くなって演奏には耐えられないけど、ゴミとして燃やされるのはかわいそうだから、両端だけでも教材用(ピアノの構造を知るためのスケルトン)として活かしてみた》を伝え、ピアノ製造者の熱き情熱も理解せせる。」

xii. 再び、「弾き歌い」の発表に戻り、できるだけクラス全員の発表を終える。

学生には「ピアノの音より、歌声が大きいか」を要求し、「自分でちょうど良いバランスだと感じる」ときは声が小さすぎていることを実体験させて理解させる。つまり「手の指で両耳をふさいだ状態で発語・発声させて、自身の声がどう聞こえるか?」「初めて、録音された自身の声を再生して聴いたとき、なぜ、違和感を持ったか?」について、学生たちとの問答するうちに、『内耳・中耳・外耳』の存在や、ほとんどが空気振動による外耳からの譲歩となる「他人の声」「外界の音」と、骨振動をも含んで内耳から伝わる音とのミックスとなる「自身の音声」は、音量やニュアンスが違ってくることに言及することになる。要するに、「自分が感じるほどには、客席に自分の声は届いていない」ことに早い段階から気づかせてやるのが肝要なのである。これもコミュニケーションという観点からすると、自己と他

者との距離感を音声によって築くための演習足りうるのではないだろうか。音楽家の中でコミュニケーション能力に欠ける者は、アンサンブルが下手であるのは間違いなく、常に主役になりたがる演奏家や、どんな内容でも朗々と大音量で歌い上げる歌手などはその典型で、彼らは決してアンサンブル(弦楽アンサンブルや小規模なコーラスなど)の素敵なパートとは成りえないのである。音楽業界で使い勝手の悪い者は、結局、一般社会でも周囲とはなかなかうまくやっけていけない可能性が高いと言えよう。

xiii. 最後には「14ひきのこもりうた」を3拍子パターン→moll→ジャズ というパターンにて全員で歌ってみる。以下のことを学生は体験することになる。

①元来が4拍子の楽曲を、3拍子(教員のピアノ伴奏に乗せて)で歌ってみると、なにやら楽しげで遊園地のメリーゴーランドに乗っている感覚になる。

(譜例-⑧a)

②4拍子に戻し、moll(短調)で教員が弾くピアノに乗せて全員で歌う。これは陰鬱でまるでお通夜のようなものである。(譜例-⑧b)

③dur(長調)に戻し4拍子で少しアップ・テンポなジャズもどきの裏打ち多用(教員のピアノのリードによる)なビートで全員で歌う。学生の世代の言葉で表現すれば《チャライッ!感じになり、踊りだしそうで子守唄には不向きな楽曲に変貌する。(譜例-⑧c)

譜例-⑧a (なにやら楽しげ)

譜例-⑧b (陰鬱)

譜例-⑧c (踊りだしそう)

譜例-⑨a (楽しくない)

譜例-⑨b (過疎化防止ソング)

譜例-⑨c (ポップなわが町讃歌)

xiv. 同様のことを、唱歌「ふるさと」を使って学生たちと楽しむ。

- ①元来が3拍子の楽曲を、4拍子（教員のピアノ伴奏に乗せて）で歌ってみると、あまり楽しくない。教室で社会科の勉強をしているみたいだ。（譜例-⑨a）
- ②3拍子に戻し、moll（短調）で教員が弾くピアノに乗せて全員で歌う。これは陰鬱でまるで「田舎の過疎化防止ソング」のようである。（譜例-⑨b）
- ③Dur（長調）に戻し4拍子で少しアップ・テンポなジャズもどきのシンコペーション多用（教員のピアノのリードによる）のビートに乗って全員で

歌う。《ポップなわが町讃歌》風になり、未来を歌う楽曲に変貌する。（譜例-⑨c）

3. 弾き歌い実技②、毎日の子どもの歌、春の歌、ピアノの演奏法の色々（6回目の授業）
 - ・弾き歌い②
 - ・今回の共通課題（右手&声→歌パート単旋律＝メロディー、左手→ベース単音）にクラス全員（例年30名前後）がトライするように学生たちを励ましながら授業を進める。
- ①前回同様に、発表の合間に、音楽用語の解説を加える。学生が飽きないように、「数名の発表→音

楽用語の解説」を繰り返す。

- ②たとえば「経過音」については、「14ひきの子守唄」中の第2小節3拍目の右手C音と左手B音の例を用いて説明する。(譜例-⑦の↑A部分)
- ③手の各指の機能強化の方法を伝える。掌を浮かせて指先だけによって机に置き、各指1本ずつで机面を垂直にノックし「コツッ、コツッ！」と歯切れの良い音が出るように訓練する・・・と実演して見せながら説明する。更に、第1指と第3指、第3指と第5指、第2指と第4指、という2本ずつによるノック音が同じような音量と歯切れよさで鳴るように訓練を奨励する。



写真w-① (指1本でノック)

写真w-② (指2本でノック)

- ・「子どもの春の歌」の中から数曲を全員で歌ってみる。著名な楽曲と作詞家、作曲家などについては、舞台経験^(註3)上で知りえた豊富且つ貴重な情報を、学生たちに惜しみなく伝える。現在の(社)日本童謡協会会長である作曲家：湯山昭氏については、特に詳しく語る。代表作「おはながわらった」(詞：保富庚牛)、「あめふりくまのこ」(詞：鶴見正夫)、「おはなしゆびさん」(詞：香山美子)などについては、教員が弾き歌いの模範を示し、それを模倣して学生たちが歌ってみる。

- ・「毎日の子どもの歌」から保育所でよく使われる曲をピック・アップして全員で歌ってみる。そして、音楽の持つ教育的効果、つまり「儀式」「礼儀」「生活規範」「道徳」などの励行に及ぼす影響力について説明する。その上で、使い方を誤れば、独裁国家の為政者が国民を扇動するために、ある種の交響楽曲を悪用したような例も過去にある、との説明もしておく。

- ・次回の授業の内容を提示して終わる。

4. 弾き歌い実技③、音楽用語とイタリア語、移調(7回目の授業)

- ④最終目標(右手→和音、左手→ベース単音、声→歌詞&メロディー音で歌唱)の課題に半数以上の

学生がトライするように授業を進めていく。

- ⑤前回同様に、発表の合間に、音楽用語の解説を加える。学生が飽きないように、「数名の発表→音楽用語の解説」を繰り返す。
- ⑥たとえば、音楽の速度を表すテンポ(Tempo)でもil tempo(速度・お天気)、in tempo(一定の速度で)、a tempo(元の速度に戻って)、bell tempo(晴天)などと、イタリア語の語源に関連付けて説明する。
- ⑦また、音量の強弱加減を表現する際に使用されるMezzo(メッツォ)を正しく理解させるために①メゾと発語しないこと②意味は「やや」ではなく「半分」であることを徹底させる。よってmezzoforteは「やや強く」ではなく「強さの加減を半分にする」と記憶させる。更に、ピアノッシモ(pianissimo)は「超オー・弱く」であり、教員がイタリア留学中の頃に受けたオペラ指揮者のレッスン時に、指揮者が「dame, dame, damissimo!」(ダメ、ダメ、ダミッシモ)と発語し「ぜんぜんダメだ」という意味の造語を駆使していたエピソードを披露し、イタリア語の構造についての興味・理解を促す。
- ⑧ピアノという楽器の正式名称が「il pianoforte」であるから、軽音楽バンドのスコア譜に「P, f」と記載されるし、弱い(piano)音も、強い(forte)音も出せる楽器であることも言葉の意味とともに記憶させる。
- ⑨巷にはイタリア語をもじった用語や商品名などが溢れているが、学生たちにクイズ形式にて「これって元々はイタリア語かもしれない!？」という言葉を挙げさせてみる。「アルト」「セレーナ」「パッソ」といった自動車の名前や、洗髪剤「セグレタ」、新宿にあるスタジオ「アルタ」など、色々出てくるが、それぞれに丁寧な説明を加える。
- ⑩ピアノの奏法で勘違いされがちな staccato(スタッカート)については、鍵盤をひっぱたいはいけないと力説する。打鍵時に上から強く弾き下ろすのは ataccato(アタッカート)であり、バレーボールの攻撃時にボールに「衝撃を与える」アタックと同義語だと理解させ、語頭にsが付けばイタリア語では「反義語」になるので「腕を引き上げるときにスピーディーに!」がスタッカートの本来の意味であり奏法であることを理解させる。
- ⑪Accellandoについては、自動車のアクセル(加速)と関連付けて説明すると、「徐々に速度を上げる」の意味が理解され易い。

- ・ 次回の授業の内容を予告し授業を終える。

IV. 結果と考察

毎回の授業の振り返り時や、最終回での授業全体の振り返りの対話の中で、以下のことが明らかになってきている。

- ① 音楽は、一定の規則の中でこそ美しく楽しめるものであるという点に、気づかせることが出来たと思われる。例えば、「演奏者の精神の高揚度と音楽のテンポの緩急は別問題 = 一定のテンポの中でのダイナミックスの振幅が必要」「フレーズの終わりの裏拍まできっちりとビートに含める必要がある」「細かな分割音符でもテンポは一定 = 四分音符1個と十六分音符4個は同じ時間を保持・経過する」などである。
- ② 自分の耳からの情報収集においては、自身は発語せず外界からの音に集中する必要があることに気づかせることが出来たと思われる。例えば、メロディや歌詞を聴音の作業により楽譜に書き残す時、学生たちの静寂ぶりは徐々に確かなものとなったし、著者の授業中の「面白い経験談の中に音楽理論の大事な説明が潜んでいる」という解説に、学生たちは回を追うごとに真剣に耳を傾けるようになっていた。
- ③ 情報の確認・保存のためには、メモやノートをとるという作業が効果的であることを学ばせることが出来たと思われる。人間の記憶の仕方を学ぶことによって、「思い込み」の危険さや「安易なコピー」の弊害にも気付いたという学生たちのレポートも多かった。
- ④ コミュニケーションの手段としての音楽には、まず、しなやかな心身が不可欠であるということに気づかせることが出来たと思われる。即ち、己の健全な心身を通して「真似る」「なぞる」「体感して納得する」ことの重要性和その能力の必要性を学生たちは演習を重ねることにより実感したように思われる。
- ⑤ 1名の教員でできる範囲の「音楽」「弾き歌い」「合唱」という内容満載の授業の中で、学生たちがいろいろな音楽面での知識や技術とともに、コミュニケーションの手段の一つとして使える「音楽の可能性」に気づいてくれたら、これ以上の喜びは無い。なぜならば、こどもや老人や障がいをもった人々と触れ合いながらの仕事に就くであろう学生たちにとって、「人との繋がりを掴むスキル」はひとつでも多いほうが良いと考えるから

である。きっと《芸は身を助く》と信じるものである。

- ⑥ 筆者の授業では、平易な旋律と和音で書かれている『こどものうた』2曲に、ピアノによる弾き歌いと基礎的な音楽理論の学習に適した編曲を施して伴奏譜を作成し、4ヶ月のうちにその「弾き歌い」をマスターできるようにカリキュラムを工夫している。ただ、学生に対する、器楽（ピアノ）の授業を担当している本学内の教員たちの熱心な指導があつてこそ、この授業の円滑な進行が成立するという点を、忘れてはならず、このことを文末に大きな感謝とともに書き添える。音楽教育の両輪として、声楽と器楽の教員たちの授業が学生を励まし、成長させていると言えよう。
- ⑦ 本学の専攻科福祉専攻に進学した学生たちから「老人介護施設での実習で、唱歌・童謡、昭和のヒット・ソングなどを披露すると、とても利用者が喜ばれて、施設での評価が上がる」との感謝の言葉が例年のように聞かれ、指導者冥利に尽きると思っている。
- ⑧ 全学で積極的に実施している「授業評価」からは以下のことが読み取れる。
 - ・ 平成18年から22年の5年間の授業評価からは、途中で体調不良などの理由により次年度に再履修となったり、年度途中で休学や退学となったりした学生を除けば、概ね出席率も良く学習態度も積極的で、授業自体を楽しんでいるようだったことが伺える記述が多い。成績は以下である。

（5年分のまとめ）

優（80点以上）・・・24～53%

良（70点以上）・・・46～75%

可（60点以上）・・・0～8%

V. 終わりに

本研究の更なる発展型として、「子どもの歌の弾き歌いのあるべき姿とはどういうものか」を論じ研究することが今後の課題である。また、「日本語による歌唱法」の理想型が、日本ではまだ確立されていないように思える。音楽は実演であり、時間の経過とともに消え去るものであるから、文章に残すのは難しいと思われる。研究を継続していくことにより、これらの課題を明らかにしていきたい。

本編で述べた筆者の実践；限られた時間・設備で異なる個性の学生120名前後（1回が30名前後の編成で、4回転・・・つまり1学年に30名のクラスが4クラスあるので、短大でのこの授業は同一内容を4回ずつ実施するのである）「学生のニーズを嗅ぎ取り、己の持ちう

るシーズで使えるものは全て活用する」作業の連続が、「魅力ある授業と養成校」を形成するのであろうし、その地道な努力を継続する活力はどこから来るのか？

それは、このような「論文」の形式でない「出張授業」^(註4)や「不特定多数の観客を相手にした公演や講演」^(註5)に際しての、遠慮のない聴衆の反応（フィード・バック：相手が学生や学会の専門分野の人間でない不特定多数の場合は、本当の意味で『フィード・バック』である）こそが「自身の今の在り様・人生の歩み方・専門分野の技量や魅力の程度」を探る最良の方法であるという著者の信念だからである。

「興味のあることを、やりたい時にだけ、簡単に効果が見込めるならば、苦勞せず恥もかかずに手に入れたいなあ」というのが、著者が感じる昨今の学生の印象であるが、そんな『今様大学生』をどうやって自分の担当科目の熱心な参加者にしていくか、苦惱されている教員たちへの一助として、この論文が寄与できれば幸いである。

《註》

(註1) 筆者が台本・構成をし、歌と司会を務めながら羽陽短大の学生を共演させつつ2009年度に山形県内8箇所を巡演した「子育て応援コンサート オケルンジャーとあそぼ！」は山形県生涯学習文化財団の主催で、山形交響楽団（指揮：大井剛史氏・佐藤寿一氏、ソプラノ：高橋まり子氏）の子育て応援演奏会として実施されたものである。

(註2) 社長の崎谷延好氏はピアノのリフォームも手がけるプロのピアノ業者であり、筆者が27年間上演し続けている松戸市の「障害児・者とともに楽しむコンサート」では毎回のピアノ調律の協力者であり、障がい者施設には楽器を寄贈する方である。

(註3) 2012年9月開催時で35回を数える日本童謡協会主催の「童謡祭」には、ほぼレギュラーの歌手として20回以上の出演、やなせたかし氏や故・中田喜直氏ほかの童謡界の重鎮との共演・交流がある。また故・川田正子氏との共演が常の「金の鳥音楽祭」にも数年に渡り出演し、氏の晩年まで交流があった。

(註4) 高大連携事業として山形県立天童高校で2010年から継続している「保育内容総論＝現：保育実践研究Ⅲ」での出張授業などが、年に数回ほどある。

(註5) 例を挙げれば、筆者が台本・構成をし、歌と

司会を務めながら羽陽短大の学生を共演させつつ2011～2012年度に山形県内数箇所を巡演した「0才児からのコンサート 親子で楽しいオーケストラ」は山形県生涯学習文化財団の主催で、山形交響楽団（プロのフル・オーケストラ）の復興支援・子育て応援演奏会として実施されたものであり、東日本大震災からの避難者が無料招待された。

また、2010年からは「山形いのちの電話・チャリティーコンサート」に音楽仲間（ソプラノ：高橋まり子、チェロ：増川大輔、ピアノ：須藤恵美子）とともに主体的に参加・主演し続けている。

さらに、2012年2月には、「小松原庸子スペイン舞踊団50周年記念公演」を新国立劇場中ホールにて演出した。「椿姫」「カルメン」「トスカ」のオペラ3作品を短縮し且つフラメンコによる舞踊で上演するという企画で、20名以上のスペイン人キャストも参加した公演であった。

阪神大震災の翌年と翌々年には、知的障がい者1000人が集う場でのコンサートの依頼を2年連続で受けて、『みゆ〜じ館』（著者が主宰する音楽集団）公演として実施した。（共演 歌：春口雅子、ほか）

《参考文献》

- 1) 池内友次郎 ほか：「新音楽辞典 楽語」, 音楽之友社
- 2) 近森一重：「音楽通論」, 音楽之友社
- 3) 鈴木静哉：「明解・音楽用語辞典」, ドレミ音楽出版社
- 4) 野口三千三：「野口体操 からだに貞(き)く」, 柏樹社
- 5) 高橋寛・田中ふみ子共著：「人間オーケストラ・体は楽器だ!」, いかだ社
- 6) 坂東貴余子編：「こどものうたベストテン」, ドレミ音楽出版社
- 7) 平野章子：「ピアノ・コードの押え方」, ドレミ音楽出版社
- 8) 坂東貴余子編：「シニア世代の思い出ソング」, ドレミ音楽出版社
- 9) 伊東一郎監修：「基本・解剖図」, 金園社
- 10) 近藤芳朗：「自彊術」, (株)朝日ソノラマ
- 11) 羽陽学園短期大学自己評価委員会：「自己点検・評価報告書」平成18～21年度版, 羽陽学園短期大学
- 12) いわむらかずお：「14ひきのこもりうた」, 童心社

SUMMARY

Hiroshi TAKAHASHI :

The Way to Master Singing and Playing with Piano about 2 Songs for Children in Four Months for even So Many Unlearned (in a part of Music) Students (Part 2)

Where is the way to master singing and playing with piano about 2 child' s songs in four months for even so many unlearned (in a part of Music) students ?

This paper aims to consider how to get this way in may lesson (in Uyo Gakuen College) of this 15 years.

(Uyo Gakuen College)